

「芸術」としてのアートから、「くらしのわざ」としてのアーツへ
—我々はなぜ、ケニアの聾の子供のダンスに魅惑されるのか？—明治学院大学社会学部付属研究所
吉田優貴

発表者が聾の子供たちの中で合計 2 年あまりフィールドワークを行ってきた中でしばしば目にしたのは、ダンスだった。彼らのダンスは「音の存在に基づいていない」という特徴をもちながらも、次の三つの異なるものに分類することができる。

一つ目は、競技会向けに練習を積み重ねて成り立つダンスである。「指揮者」役の子供が全体の動きを統制し、一人一人が全体のまとまりを崩さないように体を動かし全体として一糸乱れない動きを作り上げる。二つ目は、聾学校の中庭で一人が踊り出すのをきっかけに周りが次々と踊りに巻き込まれていったダンスである。競技会のダンスほど明確ではないものの一人が動きを先導していくように見える。その一方で振付けはその場で踊るうちに決まっていき、互いの動きをずっと目で追わなくても踊りながら全体としてまとまっていく。三つ目は、聾の子供の帰省先で目撃したダンスである。前出の二つのダンスと大きく異なる点として、第一に耳の聞こえる子供と聞こえない子供が入り混じって踊っている点、第二にその場にいた子供たちの体の動きは基本的には全くバラバラであるにも拘らず、互いの身体がいわば共鳴し合っているような状態になっていた点が挙げられる。

いずれのダンスも、「調和」や「共鳴」といった語で表現することは可能である。だが、特に三つ目の事例は、個々の身体の動きがバラバラであるにも拘らず「調和」がとれ「共鳴」し合っている（ように見える）という、言葉にすると奇妙な特徴をもっている。加えて、三つの事例を比較検討したこれまでの発表では、一つ目よりも二つ目、二つ目よりも三つ目のダンスに魅力を感じるとするオーディエンスがほとんどだった。

それぞれのダンスでは、何が起きていたのか。あるダンスについて「魅力を感じる」と評する基準はどこにあるのか。この問いに答えるため、本発表では競技会のダンスを場所も時間も隔たったところで「再現」できてしまった聾の子供の事例を検討する。競技会に向けて聾学校内で練習が行われていたが、約半年後、その場で一緒に練習したことのない年少の子供が帰省先で同じダンスをした。聾学校内でのダンスの練習とその子供による帰省先でのダンスの動画を同時に再生し比較検討したところ、体の動きのパターンだけでなく、動きのタイミングもほぼ一致していることがわかった。時間的にも空間的にも隔たったところで、練習していた子供たちとそうではない子供の身体があたかも共鳴し合っているかのように見える事例である。この事例から窺えるのは、同じ時間と場所に居合わせ聴覚や視覚で音なり動きなりを共有しなくても身体が共鳴しうるということである。

この事例を検討することで、個々人の動きが「バラバラ」であることや感覚を「共有していない」ことが、逆説的に身体同士の共鳴を生んでしまうことを明らかにする。そして、この特徴を合わせもつ三つ目のダンスにこそ、我々は、舞台などの特殊な場で披露されるような「洗練」され「統制」されたダンスにはない「くらしのわざ」の魅力を感じてしまうことを明らかにする。